

## 床下の蟲：文苑

著者	尾藤，憲祐
雑誌名	龍南會雜誌
巻	1 4 6
ページ	7 2 - 7 3
発行年	1912-06-20
その他の言語のタイトル	床下の虫：文苑
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/6369">http://hdl.handle.net/2298/6369</a>

あの可愛らしい夏ちやんてば

小性みたいなあて姿

何時も歌ふは「月様いくつ」

路になやむだ旋花の

ほんのり淡い櫻色

頬にこぼるゝもろ酩

わしや口紅がきにかゝる

舞ふてみやんせ振袖つけて

その振袖を雲形に

ふつてみやんて綴帳の

かげにかくれてにつこり笑ふ

若衆歌舞伎のするやうに

Doiが泣きましょ母まちに

あの可愛らしい夏ちやんてば

吹くはくしやばんの玉を

小性みたよなあて姿

莊子か……蝴蝶か……

蝴蝶が夢に莊子となるか

わしや知らぬ／＼

吹かしやんせなまだ日は高い

じやい云てDoiが泣くだろに

## 床下の蟲

憲

暗の

ひた／＼と寄せ来る潮の底に

尾の如く私の骸が横はつてゐる。

生の腫、そうした鋭い官能は

今、生々とよみがわる。

反撥力ある暗の微粒分子は

手、足、顔、に跳ね返つて

目の前に躍り上る毎に

一種の柔い壓迫を感じる。

口、鼻、さては全身の毛穴より

恐ろしい勢で吸ひ込まるゝ闇の色は

どき／＼と、危げに

タイムを刻む血潮の流れに

香のない黒薔薇を思はする。

ふと、ぢーちろりん……

床下で鳴く蟲の音である。

ちーちろりん

私は北國へ來た急行列車が

冷たい色彩に驚いて氣の狂つた

若い運轉手に把手を逆に廻され

馬鹿な速力で南の方へ引返す様な

途方もない氣分にとらはれて

ちーちろりん、と呼應した。

ちーちろりん

手術刀の響を聞いた時

氣の弱い介添人に起る

こそばゆい痙攣を感じて

ちーちろりん、がやるせない。

## 露のめぐみ

陶山 旭溪

かげろふもゆる春の日の

長き心も知らずして

つめたきへやの一隅に

我は病になやむなり

心は野べにあくがれて

思、雲井にはすれども

籠にとられし鳥のごと

まゝならぬ身をいかにせん

たとひ病はいわむとも

かくて日數を重ねなば

千ぐさの花もちりやせん

雲雀の歌もたわやせん

まちへし春もいたづらに

病の床の夢なるか

さはれ思へばこの身さへ

いどほそりしきのふけふ

花よりさきにちりやせん

惜むは春の日のみかな

霞よりふる春雨に

ぬれし櫻の一枝を

かめに手活けて妹は

あはれ我をばなぐさめぬ

世にうれしきははらからの

血別けしなさけやさしきは